The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

パーニニ文法における補完システム
―― *ad* と *ghas* の交代をめぐる問題――

尾　園　絢　一

1．補完（Suppletion）

一つの活用表を複数の語幹で分担し，補い合う，補完現象（Suppletion）は様々な原因から起こる．その中の一つとして，動詞の語義が元来持っている時間的性質（Aktionsart）がAspekt「相」に基づく語幹の選択（現在語幹::アオリスト語幹）を制約することに起因するものがある[1]．「食べる」を意味する2つの動詞 √*ad* と √*ghas* は補完活用（suppletives Paradigma）を構成することが知られている．*ad*（uridg. *√ h_1ed）は，元々の語義が強い持続的（iterativ-durativ）性質を持っていた（「噛んでいる」）と考えるならば，未完了相（imperfektiver Aspekt）による表現に適しており，語幹形成接尾辞の助けを借りずに現在語幹（*ad-ti*）を作ることができるが，完了相（perfektiver Aspekt）に対応するアオリスト語幹を作ることができない．他方，元々は瞬間的（punktuell）又は短時間・終点的（momentativ-endterminativ）な性質を持っていたはずである，*ghas* はアオリスト語幹を作ることはできても現在語幹を作ることができない．その結果，*ad* が現在語幹を作り，*ghas* がアオリスト語幹を作ることにより，活用表を相補的に構成することになる．ギリシア語（ホメロス）では，ἔδω，ἐσθίω（<Iptv. *ἔσθι < *h_1*ed-d*^{h}*i*）は現在語幹を担い，アオリストは ἔφαγον「食べた」（<*é-b*^{h}*ag-e/o-* 又は *é-b*^{h}*$_o$g-e/o-*, cf. ai. *bhajati*「分け前に与る」）が担っている[2]．完了語幹は βέβρωκα（*√*g*^{w}*erh*$_3$「飲み込む」，cf. ai. *jagāra*）と Ptz. ἔδηδως（<*h_1*e-h*$_1$*d-u̯ōs*）[3] のように2つの動詞から構成される．

2．パーニニ文法学における補完活用

複数の独立した動詞が一つの活用表を分担するという現象を，パーニニは，基本的には一つの動詞が一つの活用表を担い，一定の条件の下で，Allomorph（e.g. *ghasḷ-bhāva-*, *vadhi-bhāva-*）が現れると教える．補完現象をどのように教えるかは動詞によって様々である．DhP I に登録される動詞，つまり幹母音現在語幹を作り，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

幹母音以外にアクセントを持つものの中，幾つかは Pāṇ. VII 3,78 による代置[4] によって現在語幹が導き出される．E.g. *pā* (DhP I 972) >*píb-a-*, *ghrā* (DhP I 973) > *jíghr-a-*, *dhmā* (DhP I 974) >*dhám-a-*, *sthā* (DhP I 975) >*tíṣṭh-a-*. 他方，現在語幹 (athematisch) を持つが，それ以外の語幹を作る場合 (*ārdhadhātuke*) に別の動詞 (e.g. Präs. *atti* :: Aor. *aghasat*, Präs. *hanti* :: Aor. *avadhīt*) が用いられる場合については Pāṇ. II 4,35 以下に定められている．Pāṇ. II 4,36–40 は *ad* が *ghas*, *jagdh* に代置される条件を定めている．概ね（ヴェーダの）言語事実に対応するが，以下に論ずるように事実から逸脱する規則や陳述が一部見られる．

3．ヴェーダにおける *ad*～*ghas*

√*ad* は Präs. *átti*, (Ipf. 2., 3.Sg. は *ā́vayas*, *ā́vayat* を持って補完する→ 3.3.), Fut. *atsyati*, Kaus. *ādayati*, Pass. *adyate* 等を作り，√*ghas* は Aor. (*a*)*ghas-*, Perf. *jaghā́sa*, Desid. *jíghatsati*, VAdj. *jagdhá-* 等を作ることで活用表や派生を相補的 (komplementär) に担う．

3．1．Wz.-Aor. (*a*)*ghas-*[1]

√*ghas* は Wz.-Aor. *ághas*, *aghat*[5], *aghastām* (*aghattām* RVkh V 7,2(l)), *ákṣan* 等を作る (ŚrSū には *a*-Aor. が現れる，→ 3.3.)[6]．動物犠牲祭の神格への献供 (*daivatāni*) の時に Maitrāvaruṇa 祭官が発する指図 (*praiṣa-*)[7] の文言から，Ipf. Du. *ā́ttām* (*ā́-āttām*), Ipf. Sg. *ā́vayat* (*ā́-āvayat*, → 3.3.), Iptv. 3.Du. *ghástām* (～MS *ghastā́m*), Konj. 3.Sg. *ghásat* (cf. jav. *gaŋhəṇti*) 等の語形が回収される：

VS XXI 43–45 (～RVkh V 7,2(f)～MS IV 13,7: 208,4～KS XVIII 21: 281,19～TB III 6,11,1–2 ～MānŚS V 2,8,37～ŚāṅkhŚS V 19,15 (Pratīka))

hótā yakṣad aśvínau. chā́gasya havíṣa ***ā́ttām*** *adyá madhyató méda údbhṛtaṃ purā́ dvéṣobhyaḥ purā́ páuruṣeyyā gṛbhó.* ***ghástāṃ*** *nūnáṃ ghāséajrāṇāṃ yávasaprathamānāṁ sumátkṣarāṇāṁ śatarudríyāṇām agniṣvāttā́nāṃ pī́vopavasānāṃ pārśvatáḥ śroṇitáḥ śitāmatá utsādató 'ṅgādaṅgād ávattānāṃ.* (中略) //43// *hótā yakṣat sárasvatīṃ. meṣásya havíṣa* ***ā́vayad*** *adyá madhyató méda úddhṛtaṃ purā́ páuruṣeyyā gṛbhó.* ***ghásan*** *nūnáṃ.* (中略) // 44 // *hótā yakṣad índram. ṛṣabhásya meṣásya havíṣa* ***ā́vayad*** *adyá madhyató méda úddhṛtaṃ purā́ páuruṣeyyā gṛbhó.* ***ghásan*** *nūnáṃ.* (中略) // 45 //

Hotṛ は両 Aśvin[8] を讃えるがよい．［両者は］供物である山羊の，真ん中から取り出された脂肪（＝*vapā́*-「大網」）を今日（すなわち，先行する *vapā-homa* において）食べた，諸々の敵意より先に，人間の捕獲より先に．今は，食べよ，食べることにおいて駆り立てる（食欲をそそる），牧草を一番［の栄養］とする，流れ（肉汁？）を伴う，100 の Rudra に属する（捧げられる？），火で甘く（美味しく）された，周りに脂肪がある［肉片を］，

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

わき腹の［部位］から，臀部から，前足から，終わり（直腸？）から[9]，一部位ずつ，切り取られた［肉片を］．（中略）//43// Hotṛ は Sarasvatī を讃えるがよい．［Sarasvatī は］供物である羊の，真ん中から取り出された脂肪を今日食べた，諸々の敵意より先に，人間の捕獲より先に．今は，食べるがよい．（中略）// 44 // Hotṛ は Indra を讃えるがよい．［Indra は］供物である雄の羊の，真ん中から取り出された脂肪を今日食べた，諸々の敵意より先に，人間の捕獲より先に．今は，食べるがよい．（中略）//45//

ここでは Konj. *ghasat* が使用されているが，√*ad* の Konj.[10] を使用することも可能であったはずである．√*ghas* の語義が元来持っていた，Aktionsart が語幹の選択に関与している可能性が考えられるが，用例に基づいて証明することは難しい．

Kāśikā ad II 4,39[11] は，この箇所に現れる，Aor. *ghástām* と Ipf. *áttām* をヴェーダ語特有の異例形と説明する．Iptv. *ghástām* については，恐らく Kāśikā はオーグメントのない $l^{\text{UṄ}}$ (Inj. Aor.)[12] と理解していたものと推測される[13]．Pāṇ. VI 4,100 により *ghas* は子音で始まる接辞又は語尾の前では *a* が脱落するが（*ghas*>*ghs*）[14]，*ghástām* にはこの操作が起こっていないことが異例である．Ipf. *áttām* は $l^{\text{UṄ}}$ (Aor.) と解釈されており[15]，その場合，*bahulam*「様々に」[16] によって，$l^{\text{UṄ}}$ の前であっても *ghas* の代置が起こらないことが正当化される．

Wz.-Aor. は RV，YV に多く現れるが，ヴェーダ散文にもしばしば見られる．E.g. *ná vā́ etásya brāhmaṇā́ ṛtāyávaḥ purā́nnam akṣan*「天理に従うバラモンたちは昔はこうした者の食べ物を食べることはなかったのだ」TS I 5,2,1[P], TS II 2,5,5[P]．パーニニは Wz.-Aor. はマントラにおいて用いられると教えるが[17]，ヴェーダ散文に見られる言語事実を考慮していない．

3．2．Them.Aor. *aghasat*

MānŚS V 2,9,6 は，上述の Praiṣa（→ 3.1.）の中で献供する神格に応じて活用を変化させること（*ūha-*）を教える：Konj. Präs. *adat*, *adatām* (Iptv.), *adan*, Konj. Aor. *ghasat*, *ghastāṃ* (Iptv.), *ghasan*, Ind. Aor. *aghasat*, *aghastāṃ*, *aghasan*．また ŚāṅkhŚS VI 1,5 には *a*-Aor. *aghasat*, *aghasan*, Wz.-Aor. *aghat*, *akṣan* が挙げられ，*a*-Aor. と Wz.-Aor. の両方が Ūha に用いられるとする．上述の MānŚS は，両数に Wz.-Aor. *aghastām* を，単数と複数に *a*-Aor. *aghasat*, *aghasan* を挙げていることが注目される．*aghasat* は 1.Sg. **aghas-am*（<**a-ghas-ṃ*）が *aghasa-m* と再解釈されたことに由来するもの（cf. Ipf. *ādat*, → fn. 22）か，又は Konj. *ghasat* への類推から生まれ（Iptv. Aor. Du. *ghastām*::Ind. Aor. Du. *aghastām*>Konj. Aor. 3.Sg. *ghasat*:: X; X=*aghasat*），次第に Wz.-Aor. *aghas-*[t] に取って代わったものと推測される．

Pāṇ. II 4,37 は Aor. と Desid. を作る時は *ghas* が代置すると教える[18]．*ghas* は *ḷ*

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

を記号音（*it*）に持つので，Pāṇ. III 1,55 により[19]，*a*-Aor. *aghasat* が導き出される[20]．*a*-Aor. *aghasat* は ŚrSū 以降に普及し，パーニニの時代には標準的な形となっていたものと推測される．

3．3．Ipf. *ā́vayat, ā́dat*

√*ad* の Ipf. 2., 3.Sg. は**āva-*「栄養」の Denom. *āvaya-*[t] (Karl Hoffmann, *Aufsätze zur Indoiranistik*, Band 3, Wiesbaden: L. Reichert, 1992, p. 773) をもって補完することが知られている．√*ad* から作るとすれば，**ā́t*（<**á-ad-t*）が期待されるが，明瞭化のため避けられたものと考えられる（Hoffmann, op. cit., p. 770）．但し，RV X 68,6 に見られる *ā́dat* は √*ad* の Ipf. とも解し得る[21]（Hoffmann, op. cit., p. 771）：*dadbhír ná jihvā́ pári-viṣṭam* ***ā́dad***[l] *āvír nidhī́mr akṛṇod usríyāṇām*「あたかも歯たちによって，舌によって，供されたものを食べたかのように［Vala「砦」を弱体化させる時，］彼（Bṛhaspati）は赤い［牛］たちからなる蓄えたちを露わにした」．Ipf. *ādat*[22] は ŚāṅkhŚS, ĀśvŚS にマントラの改変（*ūha-*）の例として挙がっている（→3.2.）．パーニニは *ādat, ādan*, etc. が *ad* の標準的な Ipf. であることを教える：Pāṇ. VII 3,100 *adaḥ sarveṣām* [*aṭ* 99, *apṛkte* 96, *sārvadhātuke* 95, *aṅgasya* VI 4,1]「全ての者たちによれば，*ad* の後に，単子音の sārvadhātuka（つまり語尾）の始めに付加音 a^{T} が生じる」．ŚrSū 以降，Ipf. *ādat* は急速に生産的になり，パーニニの時代には標準形となっていたものと推測される．他方，*āvaya-*[t] に直接言及する規則は見いだせない．パーニニがこの形を見落としたのか，説明する必要がないと考えたのかは判断が難しい．Nighaṇṭu II 8 には *āvayati* が食べる行為を表す動詞（*atti-karman-*）として挙げられている（Hoffmann, op. cit., p. 772）．Sāyaṇa ad RV X 113,8 は Nighaṇṭu II 8 に基づき，*ā́vayat* を *āvayati* の Ipf. とした上で，*abhakṣayat* と語釈する．

3．4．Perf. *jaghā́sa*, etc.

完了語幹は *ghas* から作られる．√*ad* の Perf. の用例は，文法学者が挙げるものを除けば，ヴェーダにも古典サンスクリットにも知られていない．にもかかわらず，Pāṇ. II 4,40 は *ad* と *ghas* のどちらかから作られると教える：Pāṇ. II 4,40 *anyatarasyām liṭi*「l^{IT} の前では，*ad* の代わりに *ghas* が任意に生じる（*ad* か *ghas* のどちらかである）」．ここで言う *anyatarasyām*「どちらか一方で」は，完了語幹を作る場合は，*ad* か *ghas* のどちらかが用いられることを示している．Kāśikā は *jaghāsa, jakṣatur, jakṣur, āda, ādatur, ādur* を挙げる．だが，恐らく，この規則は *ad* と *ghas* とが完全に交換可能な関係にあることを意図したものではない．*ghas* は完全な活用表を持たない動詞（defektiv）なので，理論上 *ad* から Perf. を作ることができ

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

ても，実際に用例がない場合は，用いられない（→ 4）．とはいえ，もしパーニニの時代においても *ad* の完了語幹が全く存在しなかったとすれば，Pāṇ II 4,37（→ 3.2.）に *liṭi*「l^{IT}（Perf.）の前で」という条件を加えればよく，この規則を立てる必要がない．こうしたことから，パーニニの時代になると，√*ad* から新たに完了語形が限定的に作られ，完了語幹 *jaghas-* の活用表の中に混入していた可能性が考えられる．パーニニの規則から存在が推測される形は 2.Sg. *āditha* である．Pāṇ. VII 2,66 によれば，*ad* の後で，Perf. 2.Sg. *tha*^{L} の前に *i* が生じる[23]．また Pat. ad VII 2,61 には *āditha* と *jaghasitha* が現れることから，当時実際に使用されていた可能性がある．

4．DhP I 747 *ghas*$^{L'}$

ghas$^{L'}$ は *ad* の代置要素（Pāṇ. II 4,36–40）と見なされる．一方 DhP I 747 にも *ghas*$^{L'}$ が登録されており，本来作ることができない現在語幹をはじめ，あらゆる語形を作ることができててしまう：

Nyāsa ad Pāṇ. II 4,40

nanu ca "ghasḷ adan" ity etasya jaghāsa jakṣatuḥ jakṣur iti bhaviṣyati, "ada bhakṣaṇe" ity asya āda ādatuḥ ādur iti. asti ghasiḥ prakṛtyantaram, "sṛghasyadaḥ kmarac" iti kmarajvidhānāt. tat katham iha liṭi vikalpavidhānam? ghaseḥ prakṛtyantarsyāsarvaviṣayatvajñāpanārtham / tena tasya sārvadhātuke ārdhadhātuke ca yatra liṅgaṃ nāsti vacanaṃ ca, tatra prayogo na bhavati.

（反論）だが，DhP I 747 *ghasḷ adane* というこれ（動詞語基）にたいしては *jaghāsa, jakṣatur, jakṣur* と［いった形が］用いられることになり，［同時に］DhP II 1 *ada bhakṣaṇe* というこれ（動詞語基）に対しては *āda, ādatur, ādur* といった［形が用いられることになる］ではないか．［というのも］別の語基 *ghas*（*ghasi-*）がある；*sṛ-ghasy-adaḥ kmarac*（Pāṇ. III 2,160）という ^{K}*mara*^{C} の規定があるから．なのに，どうしてここでは l^{IT} の前で任意規定があるのか？（答え）別の語基である *ghas* は全て［の形］を対象とするのではないということを示唆するために．それによって，それ（*ghas*）に関して，sārvadhātuka と ārdhadhātuka の前で，手がかりがなく［語形の］明言もない場合，その場合は使用は起こらない．

Pāṇ. III 2,160 は *ghas*（*ghasi-*）の後ろに *kṛt*-Suffix ^{K}*mara*^{C} を導入して *ghasmara-*（cf. *ghasvara-*「食らう［者］」ManB II 5,1）等が作られることを教えているが[24]，^{K}*mara*^{C} の前で，*ad* から *ghas* への代置を定めた規則はないので，当該規則の *ghas* は代置要素ではなく動詞語基でなければならない．だが，DhP I 747 *ghas* が完全な活用を持つ動詞語基として存在するならば，*ad* から *ghas* への代置（Pāṇ. II 4,40, → 3.4.）を適用しなくても完了語幹を作ることが可能になり，Pāṇ. II 4,40 が無意味にな

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

る．そこで，DhP I 747 *ghas* は完全な活用を持たない（*na sārvatrikaḥ*）動詞であるから[25]，Perf. は，DhP I 747 の *ghas* からではなく，DhP II 1 *ad* から Pāṇ. II 4,40 による代置を経由して作られると説明することにより，Pāṇ. II 4,40 の存在意義が認められることになる．現在語幹又はそもそも動詞形が見いだせない動詞語基の相当数が DhP I に登録されており[26]，*ghas* もまた特定の派生形（*ghasamara-*, etc.）を導き出すために代置要素の *ghas*$^{\text{L}'}$（*ghasḷ-bhāva-*）とは別個に登録されたものと説明され得る．だが，DhP I 747 *ghas*$^{\text{L}'}$ もまた *ḷ* を it するので，*a*-Aor. を作ることができる（→ 3.2.）．つまり，*aghasat* は DhP II 1 *ad* から Pāṇ. II 4,37 による代置（*ad*> *ghas*）を経由して作られるが（→ 3.4.），同時に DhP I 747 *ghas* からも同じ形が導き出されることが問題となる．パーニニ自身が代置要素と動詞語基とをどこまで厳密に区別していたかについては今後さらに個々の動詞語基を精査する必要がある．

1）インド・ヨーロッパ祖語の動詞組織・カテゴリー，用語等については後藤敏文「インドヨーロッパ祖語における動詞表現の諸カテゴリー――枠組み再建のスケッチ――」『文化の基礎理論と諸相の研究』（岩手大学人文社会学部総合研究委員会，1992）を参照．
2）Cf. Daniel Kölligan, *Suppletion und Defektivtät im griechischen Verbum* (Bremen: Hempen, 2007), p. 67ff.　3）*ἑλεύθ-*:: *ἐλήλυθα* (*h₁le-h₁lud*^{h}-) のような型に倣って形成されたものと思われる（Helmut Rix, *Historische Grammatik des Griechischen: Laut- und Formenlehre*, 2. Auflage [Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1992], p. 205）．　4）Pāṇ. VII 3,78 *pā-ghrā-dhmā-sthā-mnā-dāṇ-dṛśy-artti-sartti-śad-sadām piba-jighra-dhama-tiṣṭha-mana-yaccha-paśya-rccha-dhau-śīya-sīdāḥ* [*śiti* 75, *aṅgasya* VI 4,1]「*pā, ghrā, dhmā, sthā, mnā, dā, dṛśy, ṛ, sṛ, śad, sad* の語幹の代わりに ś を it とするものの前で，*pib, jighr, dham, tiṣṭh, man, yacch, paśy, rcch, dhau, śīy, sīd* が生じる」．　5）本来は *aghas*（<**a-ghas-t*）．*aghat* は 2 次的に成立した形（Hans Oertel, *Kleine Schriften I* [Stuttgart: Franz Steiner Verlag], p. 262）．
6）ヴェーダ文献の略号は Toshifumi Gotō, *Die "1. Präsensklasse" im Vedischen* (Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 1987), pp. 15–19 に従う．　7）Cf. Julius Schwab, *Das Altindischen Tieropfer* (Erlangen: Verlag von Andreas Deichert, 1886), p. 144.
8）白 YV では，神格は Aśvin（Sautrāmaṇī, cf. KātyŚS XIX 6,24）．黒 YV の神格は Indra と Agni（KS は Aśvin），RV 学派は Agni と Soma（Agnīṣomīya Paśu, cf. ŚāṅkhŚS V 19,15）．
9）*utsādatáḥ*: Paul-Emile Dumont, TB（*Proceedings of the American Philosophical Society* 106, no. 3）p. 259 は不確かとしながらも「直腸」（rectum）と訳す．Mahīdhara ad VS XXI 43 は「切り口の部位」（*chedanapradeśa-*）と解釈する．　10）E.g. *ádat* AVŚ X 8,22, +*ádat* MS III 2,8^{p}: 23,3, 3.Pl.*ádān* (hypercharakterisiert) AVŚ VI 50,1, *adan* AB VIII 24,2.
11）Pāṇ. II 4,39 *bahulaṃ chandasi* [*adaḥ* 36, *ghasḷ* 37]「ヴェーダ語では，様々に *ad* の代わりに *ghas* が生じる」．　12）Pāṇ.VI 4,74 *bahulaṃ chandasy amāṅyoge' pi* [*aṭ* 71, *āṭ* 72, *aṅgasya* VI 4,1]「ヴェーダ語では，禁止辞 *mā* と結びつく時以外でも，語幹の最初に *a*^{T} と *ā*^{T} が様々に生じる」．　13）Nyāsa はオーグメントのない *l*^{AÑ}（Inj.Präs.）と *l*^{UÑ}（Inj.

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

Aor.）の解釈を考える．　14）Pāṇ. VI 4,100 *ghasibhasor hali*［*chandasi* 99, *lopaḥ*, *kṅiti* 98, *upadhāyāḥ* 89, *aci* 77, *aṅgasya* 1］「ヴェーダ語では，*k* と *ṅ* を it とする子音又は母音で始まる［接辞］の前で，*ghas* と *bhas* の語幹の最後から 2 番目の音の代わりに lopa が生じる」．　15）Nyāsa は $l^{UṄ}$（Aor.）の可能性も考える．Aor. *-s-*（s_i^C）が脱落した形と説明する．　16）*bahulam*「様々に」は伝統的に，文法操作が適用される場合，適用されない場合，任意に適用される場合，別の条件の下（又は別の操作が）適用される場合に分類される（Cf. Yoshiyuki Iwasaki, "Formulating Devices in the Pāṇinian Grammar System: With Reference to *nipātana*, *saṃjñā*, and *bahulam*," *Sapporo Ōtani Tanki Daigaku kiyō* 札幌大谷短期大学紀要 34, 2003, pp. 19–20）．　17）Pāṇ. II 4,80 *mantre ghasa-hvara-naśa-vṛ-dahād-vṛj-kṛ-gami-janibhyo leḥ*「マントラでは，*ghas*, *hvar*, *naś*, *vṛ*, *dah* 及び *ā* で終わる動詞語基，*vṛj*, *kṛ*, *gam*, *jan* の後で，*li*（Aor.$^C l_i$, Perf. l^{IT}）の代わりに *luk* が生じる」．
18）Pāṇ. II 4,37 *luṅsanor ghasḷ*［*adaḥ* 36］「$l^{UṄ}$（Aor.）と sa^N（Desid.）の前で，*ad* の代わりに $ghas^{ḷ'}$ が生じる」．　19）Pāṇ. III 1,55 *puṣādyutād ḷditaḥ parasmaipadeṣu*［*aṅ* 52, *cleḥ* 44, *dhātoḥ* 1,91, *paraḥ* 1,2, *pratyayaḥ*1,1］「Akt. の語尾の前で，*puṣ*, *dyut*, *ḷ* を it とする動詞語基の後に Aor. $^C l_i$ の代わりに $a^{Ṅ}$ が生じる」．　20）*ad-**l**^{UṄ}* III 2,110 > ***ghas**-l* II 4,37 > ***a**^{T}ghas-l* VI 4,71 > *aghas-* ^{C}***l**$_i$ -l* III 1,43 > *aghas-l-**ti**^{P}* III 4,78 > *aghas-l-**t*** III 4,100 > *aghas-**a**^{Ṅ}-t* III 1,55.　21）それ以外の箇所に見られる *ádat* は *ā-√dā* から作られた Wz.-Aor.Med.3.Sg. である．但し RV X 68,8 の例も同様に理解することも可能である．Med. 3.Sg. *-a*（*t*）については，Jacob Wackernagel, *Kleine Schriften I*（Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1969）, p. 429ff., Toshifumi Gotō, *Old Indo-Aryan Morphology*（Wien: Verlag der Österreichisch Akademie der Wissenschaften, 2013）, fn. 202 を見よ．　22）**ād-am*, *ād-an* からの類推形成（Hoffmann, op. cit., p. 770）．　23）Pāṇ. VII 2,66 *iḍ atty-arti-vyayatīnām*［*thali* 61, *aṅgasya* VI 4,1］「*ad*, *ṛ*, *vye* の語幹の後では，*tha*^{L} の前に *i* が生じる」．　24）Pāṇ. III 2,160 *sṛ-ghasy-adaḥ kmarac*［*tacchīla-taddharma-tatsādhukāriṣu* 134, *dhātoḥ* 1,91, *paraḥ* 1,2, *pratyayaḥ*1,1］「"それを習慣とする者"，"それを義務とする者"，"それを正しく行う者"という意味で，*sṛ*, *ghas*, *ad* という動詞語基の後に ^{K}*mara*^{C} の接辞が生じる」．　25）Cf. Siddh.Kaum. 2341（DhP I 747）, Gajanan Balkrishna Palsule, *The Sanskrit Dhātupāṭhas: A Critical Study*（Poona: University of Poona, 1961）, p. 196f.　26）現在語幹を持たない動詞語基の例は Palsule, *The Sanskrit Dhātupāṭhas*, p. 197ff.

（平成 26 年度科学研究費補助金若手研究（B）課題番号 2670020 による研究成果の一部）

〈キーワード〉 Suppletion, defektiv, *ad*, *ghas*, Aktionsart, Aspekt, パーニニ，ヴェーダ語

（東北大学助教）

NII-Electronic Library Service